

TZ 〈ほんの窓〉

第 16 号 (2008.7.1) 一橋大学附属図書館高本善四郎氏助成図書コーナー「本の紹介」班

(※より詳しい情報を <http://www.lib.hit-u.ac.jp/service/tenji/takamoto/tz/tz-016.html> に掲載していますので併せてご参照ください)

「未開人」へのまなざしと『野生の思考』

未開人は知性が未発達で合理的な思考ができず、非論理的な呪術的思惟にとらわれている——そのような社会進化論的な偏見に対し、文化相対主義は、いかなる社会もそれぞれに固有の価値の体系を持っていることを指摘し、自民族の尺度で文化の優劣を論じることに異議を唱えました。今回の小展示では、構造主義人類学の泰斗、レヴィ=ストロース (1908 年 11 月 28 日生まれ、つまり今年 2008 年には満百歳!) の『野生の思考』を中心に、いわゆる「未開」の概念を再考する文献をご紹介します。

「人食い人種」は実在したか?

ジャングルの奥地には人食い人種が住んでいて、うかつに近寄ればたちまち捕まって生きながら釜ゆでにされてしまう——むかしの映画やマンガには、そんなイメージがよく使われていたものです。さすがに 21 世紀ともなると世界中どこの国でも政府が禁止しているので完全に廃れたとはいえ、未開の秘境には人食いの風習がほんの数十年前まで残っていた? 「人食い土人」の実在を (たとえば時代をもっと遡って 15-17 世紀の大航海時代¹⁾ の史実としてならば) 疑ってみたことすらない人のほうがむしろ普通なのかもしれません。1979 年に *The man-eating myth* を著したアレンズは、「この問題を考え始めたときは私自身、読者と同様、食人は昔も今もかなり普通な現象だという意見をあらかじめ抱いていた」と告白しています。けれども、文献を博搜した結果、伝聞・孫引きや誤解によるものばかりで「人類学者による信頼できる完全な直接報告を、ただの一例も見出すことができなかった」ので「他者が食人の性向を有しているという観念は、ひとつの神話である」という結論に至りました²⁾。

「カニバリズム(人肉食)の話は世界中にみられる。現代においても戦争や、遭難などの危機的状況のなかで人の肉を食べたことが伝えられている。しかし、突発的な行動としての人食いではなく、習俗や制度として人間の肉を食べているところの、俗に言う「人食い人種」といった人間社会が本当にあるのかどうかは、大いに疑問である」³⁾。他方、人肉嗜食は実在した⁴⁾と現在でも主張し続けている文化人類学者もあります。また、狂牛病⁵⁾ (BSE) との関連で多くの論者がニューギニアのフォレ人のクールー病⁶⁾ の感染源を、葬送儀礼で死体を食べたことに帰しています。ただし、人肉を食材として常用する「人食い人種」の実在の真偽は、特殊な状況下での人肉食の事例が事実として存在したこととは別次元の話として区別して考えるべきでしょう。1963 年から 1964 年にかけて高地パプア人の現地に住み込んで取材した朝日新聞記者の本多勝一も「ヒトさえ見ればとって食う人種、人間を主食にでもしているような人種、私たちに会えば必ずつかまえて食う人種というような「鬼ガ島の鬼のよう」な「いわゆるヒト食い人種」はどこにもいないとレポートしています⁷⁾。

『野生の思考』 *La pensée sauvage* と「高貴な野蛮人」

レヴィ=ストロースの 1962 年の著書 *La pensée sauvage* 『野生の思考』は、文明人の思考と本質的に異なる「未開の思考」なるものが存在するという幻想を解体しました。「未開性の特徴と考えられてきた呪術的・神話的思考、具体の論理は、実は「野蛮人の思考」ではなく、われわれ「文明人」の日常の知的操作や芸術活動にも重要な役割を果たしており、むしろ「野生の思考」と呼ぶべきものである。それに対して「科学的思考」は、かぎられた目的に即して効率を上げるために作り出された「栽培思考」なのだ。」⁸⁾

もともとは言語学の研究方法だった構造主義をレヴィ=ストロース(Claude Lévi-Strauss 1908-) が文化人類学の方法論として応用するようになったきっかけには、ロマン・ヤコブソン(Roman Jakobson 1896-1982) との相互交流がありました。両人はそれぞれナチスを避けて 1941 年にヨーロッパからアメリカに渡り、ニューヨークで出会いました。1949 年の *Les structures élémentaires de la parenté* 『親族の基本構造』⁹⁾、1958 年の *Anthropologie structurale* 『構造人類学』¹⁰⁾ で構造主義人類学を確立したレヴィ=ストロースは、1962 年にはヤコブソンとの共著論文でボードレーールの詩 *Les chats* 「猫たち」を分析しています¹¹⁾。

「自分の習慣にはないものを、野蛮と呼ぶならば別だけれど、わたしが聞いたところでは、新大陸の住民たちには、野蛮で、未開なところはなにもないように思う。どうも本当のところ、われわれは、自分たちが住んでいる国での、考え方や習慣をめぐる事例とか観念以外には、真理や理念の基準を持ちあわせていないらしい。あちらの土地にも、完全な宗教があり、完全な政治があり、あらゆることならについての、完璧で申し分のない習慣が存在するのだ。」——レヴィ=ストロースの『野生の思考』からの引用かとも見紛うばかりのこの文章は、フランスのモラリスト、モンテーニュ (Michel de Montaigne 1533-1592) の『随想録』第 1 卷第 30 章または第 31 章 (版によって章番号に異同あり) の「人食い人種について」からの一節です¹²⁾。さらに遡って紀元前 5 世紀のヘロドトス『歴史』3.38 にも「実際どこの国の人間にでも、世界中の慣習の中から最も良いものを選べといえ、熟慮の末誰もが自国の慣習を選ぶに相違ない。このようにどこの国の人間でも、自国の慣習を格段にすぐれたものと考えているのである」¹³⁾ という、文化相対主義の先駆的言辭を読み取ることができます¹⁴⁾。

クロード・レヴィ・ストロース
野生の思考



「自分の習慣にはないものを、野蛮と呼ぶならば別だけれど、わたしが聞いたところでは、新大陸の住民たちには、野蛮で、未開なところはなにもないように思う。どうも本当のところ、われわれは、自分たちが住んでいる国での、考え方や習慣をめぐる事例とか観念以外には、真理や理念の基準を持ちあわせていないらしい。あちらの土地にも、完全な宗教があり、完全な政治があり、あらゆることならについての、完璧で申し分のない習慣が存在するのだ。」——レヴィ=ストロースの『野生の思考』からの引用かとも見紛うばかりのこの文章は、フランスのモラリスト、モンテーニュ (Michel de Montaigne 1533-1592) の『随想録』第 1 卷第 30 章または第 31 章 (版によって章番号に異同あり) の「人食い人種について」からの一節です¹²⁾。さらに遡って紀元前 5 世紀のヘロドトス『歴史』3.38 にも「実際どこの国の人間にでも、世界中の慣習の中から最も良いものを選べといえ、熟慮の末誰もが自国の慣習を選ぶに相違ない。このようにどこの国の人間でも、自国の慣習を格段にすぐれたものと考えているのである」¹³⁾ という、文化相対主義の先駆的言辭を読み取ることができます¹⁴⁾。

南洋の楽園サモア

「高貴な野蛮人」を理想化し、それにひきかえ文明人は、と自身の文化を諷刺する文章が、多くの西洋人によって昔から書かれてきました¹⁵⁾が、その延長線上で、南洋の楽園に自らの幻想を投影した文芸作品に、ドイツ人ショイイルマンによる『パパラギ』¹⁶⁾があります。この本の帯は朝日新聞の「天声人語」からの「ツイアビが実在の人物であったかどうかはわからない。が、そのことばは知恵と啓示に満ちた文明批評である」という引用を掲載しており、フィクションであることを出版社自身がほのめかしています。西洋人による全くの創作か、それとも、実在のサモアの酋長の言行／原稿をある程度は反映しているのかという疑問について山本真鳥は、「多くの人類学者は同書のもてはやされ方をどちらかという冷ややかな眼で見ていたが、それは、この本がどう見ても紹介者ショイイルマンの筆になるものとしか思えなかったからである。」「ツイアビの演説がサモアに由来ある演説の形式も踏んでいないし、サモア人が通常用いるディスクールとも異なることをショイイルマン＝作者説の根拠として挙げるができる。しかしそうした文化の詳細を知らなくても、一般に人類学者が親しんでいる未開社会の人々は、文明人が未開社会との対比のうちに内省的に見出すような文明人像を挙げてきたりはしないものだ、とわれわれは知っている」¹⁷⁾と述べています。

注：

- 1) コロンブス, アメリゴ, ガマ, バルボア, マゼラン [著]; 林屋永吉, 野々山ミナコ, 長南実, 増田義郎 [訳注]『航海の記録』東京: 岩波書店, 1965 (大航海時代叢書; 第1期 1) [RAe:15:1/1] [302:26:1]
カルチュ [ほか] 著; 西本晃二 [ほか] 訳『フランスとアメリカ大陸』2. 東京: 岩波書店, 1987.9 (大航海時代叢書; 第2期 20) [RAe:15:2/20] [302:26:2-20]
- 2) Arens, W. *The man-eating myth: anthropology & anthropophagy*. New York; Oxford: Oxford University Press, 1979 [Scd:A19]
W.アレンズ著; 折島正司訳『人喰いの神話: 人類学とカニバリズム』東京: 岩波書店, 1982 [Scd:784] [778:183] p. v-vi, p. 244, p. 245
- 3) 船曳建夫「カニバリズム: その怖れに基づく神話性から、栄養補給としての現実性まで」. 山下晋司, 船曳建夫編『文化人類学キーワード』東京: 有斐閣, 1997 (有斐閣双書・Keyword series), p. 72-73 [3890:221]
- 4) Harris, Marvin. *Cannibals and kings: the origins of cultures*. New York: Random House, c1977 [Kb:A887] マーヴィン・ハリス; 鈴木洋一訳『ヒトはなぜヒトを食べたか: 生態人類学から見た文化の起源』東京: 早川書房, 1990 [3890:174] [Scd:1194]
- 5) 福岡伸一『もう牛を食べても安心か』東京: 文藝春秋, 2004 (文春新書; 416) [6400:26]
Lévi-Strauss, Claude. "Siamo tutti cannibali". *La Repubblica*. 10-11 ottobre 1993 *フランス語原文: "Nous sommes tous des cannibales".
Claude Lévi-Strauss / ce cahier a été dirigé par Michel Izard. Paris: Éditions de l'Herne, c2004, p. 34-36 (L'Herne; 82) [3890:256]
Lévi-Strauss, Claude. "La mucca e pazza e un po' cannibale". *La Repubblica*. 24 novembre 1996 *フランス語原文: "La leçon de sagesse des vaches folles". *Études rurales*. 157-158, p. 9-13 (2001) [ZQF:13] <http://etudesrurales.revues.org/document27.html>
クロード・レヴィ=ストロース; 川田順造訳「狂牛病の教訓: 人類が抱える肉食という病理」『中央公論』116(4), p. 96-103 (2001.4) [ZA:57]
- 6) Klitzman, Robert. *The trembling mountain: a personal account of kuru, cannibals, and mad cow disease*. New York: Plenum Trade, c1998. ロバート・クリッツマン著; 榎本真理子訳『震える山: クールー, 食人, 狂牛病』東京: 法政大学出版局, 2003 [3890:333]
- 7) 本多勝一「ニューギニア高地人」. 『極限の民族』東京: 朝日新聞社, 1994 (本多勝一集; 9), p. 183-377 [0800:27:9] より p. 309-310
- 8) Lévi-Strauss, Claude. *La pensée sauvage*. Paris: Plon, c1962 [3890:66] [Scd:330] [776:6] クロード・レヴィ=ストロース[著]; 大橋保夫訳『野生の思考』東京: みすず書房, 1976 [3890:70] [3890:70A] [Scd:458] [778:113A] 「訳者あとがき」より p. 354
- 9) Lévi-Strauss, Claude. *Les structures élémentaires de la parenté*. Paris: Presses universitaires de France, 1949 (Bibliothèque de philosophie contemporaine. Psychologie et sociologie)
Lévi-Strauss, Claude. *Les structures élémentaires de la parenté*. 2e éd. Paris: Mouton, 1967 (Collection de rééditions; 2) [3890:57] [Scd:367] [778:32]
クロード・レヴィ=ストロース著; 馬淵東一, 田島節夫監訳; 花崎皋平 [ほか] 訳『親族の基本構造』上;下. 東京: 番町書房, 1977-1978 [3890:99] [Scd:512] [778:124A] *クロード・レヴィ=ストロース著; 福井和美訳『親族の基本構造』東京: 青弓社, 2000 [3890:356]
- 10) Lévi-Strauss, Claude. *Anthropologie structurale*. Paris: Plon, c1958 [3890:67] [Scd:291] *同書 c1974 [778:26]
クロード・レヴィ=ストロース著; 荒川幾男 [ほか] 訳『構造人類学』東京: みすず書房, 1972 [3890:93] [Scd:300] [778:73A] [778:73B]
- 11) Jakobson, Roman; Lévi-Strauss, Claude. "«Les chats» de Charles Baudelaire". *L'Homme: revue française d'anthropologie*. 2(1), p. 5-21 (1962) [ZSF:2] http://www.persee.fr/web/revues/home/prescript/article/hom_0439-4216_1962_num_2_1_366446
Jakobson, Roman; Lévi-Strauss, Claude. "«Les chats» de Charles Baudelaire". *Claude Lévi-Strauss / ce cahier a été dirigé par Michel Izard*. Paris: Éditions de l'Herne, c2004 (L'Herne; 82), p. 125-135 [3890:256] [※Levi-Straussの描いた猫のスケッチが画面背景に多数]
佐々木明訳「シャルル・ボードレールの『猫たち』」. マイケル・レイン編; 篠田一士監訳『構造主義』東京: 研究社出版, 1978, p. 241-269 [1100:164] [Ob:A269]
川口さち子訳「Charles Baudelaireの『猫たち』」. 川本茂雄編; 川本茂雄, 千野栄一監訳『詩学』東京: 大修館書店, 1985 (ロマン・ヤーコブソン選集; 3), p. 237-261 [PAe:271:3] [242:16:3]
花輪光訳「シャルル・ボードレールの『猫たち』」. 花輪光編『詩の記号学のために: シャルル・ボードレールの詩篇「猫たち」を巡って』東京: 書肆風の薔薇, 1985 (叢書記号学の実践; 1), p. 13-38 [234:513]
[※内容には直接関係ないが、大橋保夫編; 三好郁朗, 松本カヨ子, 大橋寿美子訳『構造・神話・労働: クロード・レヴィ=ストロース日本講演集』東京: みすず書房, 1979 [3890:100] [Scd:556] のジャケットにはレヴィ=ストロース自身による猫のスケッチが使用されていた]
- 12) Montaigne, Michel de. "Des Cannibales". *Les essais*. [Paris]: Gallimard, c2007 (Bibliothèque de la Pléiade; 14), p. 208-221: 1ere livre, chapitre 30 [0800:12:14] より p. 211
「人食い人種について」. ミシェル・ド・モンテーニュ著; 宮下志朗訳『エッセー』2. 東京: 白水社, 2007, p. 59-86 [9500:455:2] より p. 64
- 13) ヘロドトス[著]; 松平千秋訳『歴史』上. 第44刷改版. 東京: 岩波書店, 2007 (岩波文庫; 青405-1) [0800:32:783] p. 354-355
- 14) 原毅彦「人類学の人類学(その1) 父からの贈りもの」『獨協大学教養諸学研究』22, p. 56-87 (1987) [ZA:405] 特に p. 66-67
- 15) 川田順造「なぜ「未開」概念を問題にするか」. 川田順造編『「未開」概念の再検討』1. 東京: リプロポート, 1989, p. 11-33 [Scd:A138:1]
- 16) Scheurmann, Erich(1920). *Der Papalagi: die Reden des Südsee-Häuptlings Tuiavii aus Tiavea*. 岡崎照男訳『パパラギ: はじめて文明を見た南海の酋長ツイアビの演説集』東京: 立風書房, 1981 [3000:469] [3000:469A] [569:177B]
都丸修一「目的地に早く着くことがたいした得になるわけではない: 南海の酋長ツイアビの演説集「パパラギ」(Be on Saturday「ことばの旅人」)」『朝日新聞』2003年5月10日(土), p. e1-e2 [ZZ:5]
- 17) 山本真鳥「山内昶著『経済人類学の対位法』(書評)『民族学研究』59(3), p. 291-296 (1994.12) [ZS:15] より p. 294

